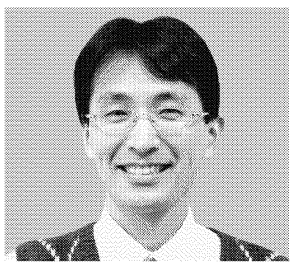


今年の日本国際賞を受賞した岸本忠三や自然免疫分野を切り開いた審良静男ら、ノーベル賞級の免疫研究者を輩出する大阪大学。熊ノ郷淳(44)は、これらスターに続く目される若手教授の1人だ。たんばく質「セマフォリン」が免疫で重要な働きを持つと世界で初めて突き止めた。膠原(こうげん)病や多発性硬化症など難病の治療法開発にまい進する多忙な日々を送っている。

今年4月、熊ノ郷は岸本が2代前の教授を務めていた医学部の呼吸器・免疫アレルギー講座(旧第3内科)の教授に就任した。審良が率いる阪大免疫学フロンティア研究センターの教授を兼務したまま、研究チームは約10人から一気に50人に増えた。

先端人

大阪大学教授
熊ノ郷 淳氏



くまのごう・あつし
1966年生まれ、大阪府出身。91年大阪大学医学部卒業、97年同大学院修了。阪大微生物病研究所助手。助教授を経て2006年学術研究センター教授。07年阪大免疫学フロンティア研究センター教授、11年に医学系研究科教授。

名門ポスト、重圧見せず

なく本人や家族と真摯に對話してくれた医師の姿に心を打たれ、自分も医学の道を目指した。父の知人や教え子らが、進学の後押しをしてくれた。晴れて医学生になり2回生の時、新聞の1面に

研究者は世界的な競争の師の目指しているものを目指せ」。先達が見つけた鉅脈を追い続けても、師のミニチュアにしかならないからだ。ただ、岸本の「あれはええ仕事や」とライバルの業績でも素直に認め、吸収しようとされるという。

免疫研究にまい進

学内で名門といわれるポストに若くして就く重圧は当然あるはずだが、笑顔や絶やさぬ柔らかな表情からはプレッシャーはみじんも感じない。優秀なスタッフがたくさんいるので、自分は自然体でベストを尽くすだけ」とたんばくと話す。

今年4月、熊ノ郷は岸本が2代前の教授を務めていた医学部の呼吸器・免疫アレルギー講座(旧第3内科)の教授に就任した。審良が率いる阪大免疫学フロンティア研究センターの教授を兼務したまま、研究チームは約10人から一気に50人に増えた。

「セマフォリン」が免疫で重要な役割を果たしているのを明らかにして以来、様々なタイプのセマフォリンの機能解明に取り組み、この分野で世界をリードしている。

例えばセマフォリン3A。病原体が体内に侵入すると、見張り役の樹状細胞がリンパ管を通過し、攻撃役の細胞に情報を伝える。この際、樹状細胞を道案内するのがセマフォリン3Aだった。

一方、多発性硬化症の患者の約3分の1は、血液中でセマフォリン4Aが増えているのを発見。患者を簡単に見分ける手法として有望で、キックアップし世界的な普及を目指している。

主な業績

「セマフォリン」が免疫で重要な役割を果たしているのを明らかにして以来、様々なタイプのセマフォリンの機能解明に取り組み、この分野で世界をリードしている。

例えばセマフォリン3A。病原体が体内に侵入すると、見張り役の樹状細胞がリンパ管を通過し、攻撃役の細胞に情報を伝える。この際、樹状細胞を道案内するのがセマフォリン3Aだった。

一方、多発性硬化症の患者の約3分の1は、血液中でセマフォリン4Aが増えているのを発見。患者を簡単に見分ける手法として有望で、キックアップし世界的な普及を目指している。

様々な機能解明 有望な血液診断

管を通過し、攻撃役の細胞に情報を伝える。この際、樹状細胞を道案内するのがセマフォリン3Aだった。

一方、多発性硬化症の患者の約3分の1は、血液中でセマフォリン4Aが増えているのを発見。患者を簡単に見分ける手法として有望で、キックアップし世界的な普及を目指している。